

Jpop の文字数と時代背景の関係

抄 録

本研究は、1990年代と2024年のJpopの歌詞の情報量の変化を調べ、その背景を考えることを目的とした。私は両親の影響で1990年代の楽曲を、友人の影響で近年の楽曲を聴く中で、最近の曲は昔より歌詞の情報量が多いと感じた。メロディーや編曲だけでなく、歌詞の密度や構成の違いがあると考え、特に歌詞の文字数に注目した。研究の目的は、両年代の歌詞の平均文字数を比べ、その変化から音楽の進化や時代の流れを考えることである。研究方法として、①歌詞の平均文字数、②1秒間あたりの発音文字数を数え時代背景との照合を行い、その理由を考察した。結果は平均文字数が約1.5倍、1秒あたりに歌われている文字数が約2.4倍に増えていた。これは音楽配信の広がり、ラップとJpopの融合、そしてリスナーの聴き方の変化が影響していると考察した。

キーワード：歌詞、Jpop、文字数

1. はじめに

1.1 研究動機

私は両親の影響で1990年代のJpopをよく聴いており、また友人の影響で近年の楽曲もよく聴いている。その中で、近年のJpopは一昔前の楽曲と比べて情報量が増しているのではないかと感じるようになった。メロディーや編曲の変化に加え、歌詞の密度や構成にも違いがあるのではないかと考えた。特に歌詞に注目したとき、文字数の変化が情報量の違いに関係している可能性があると感じたため、この研究を行うことにした。

1.2 用語

Jpop…日本で作られたポピュラー音楽。基本的には歌詞が日本語、日本人が作曲、歌唱をしているもの。

1.3 文献調査

1990年代の歌詞と現在の歌詞を比べると、大きく3つの変化が見られる。

1.3.1 文字数の変化

文献より1990年代の歌詞は一曲あたり250字程度であったのに対し、近年の歌詞は800字程度であることが分かった。また文字数の増加は、歌の中でより多くの気持ちや物語を伝えようとする傾向と関係している。

1.3.2 表現方法の変化

昔の歌詞では「会いたい」「好きだ」といった感情を直接表す言葉が多く見られたが、現在は間接的な表現を使って気持ちを例えるものが増えている。このような表現は、聴き手が自分の経験と重ね合わせやすく、幅広い解釈を可能にする。

1.3.3 使用される文字の種類の変化

1990年代の歌詞は漢字とひらがなを中心に書かれていたが、近年はカタカナや英語表現もよく使われている。これによってリズム感を持たせたり、現代的で国際的な雰囲気を出したりできる。

以上のように、1990年代と現在の歌詞を比較すると、文字数の増加、表現方法の変化、文字の多様化という三つの点で違いが見られる。歌詞は単なる娯楽ではなく、その時代の価値観や文化の移り変わりを表すものだといえる。

2. 研究目的

1990年代と2024年のJpopの歌詞のひらがな・漢字・英語などを含む文字数の平均値を比べ、1990年代から2024年にかけての変化を調べる。そして、なぜその変化が起こったのかを考察することによって日本の音楽の進化や時代の流れを明確にすることである。

3. 研究方法

3.1 実験・調査方法

本研究では、1990年代と2024年のJpopを対象に調査を行った。1990年代はレコード売り上げ数、2024年は再生回数をもとに各年代15曲ずつ、合計30曲を調査対象とした。

1. 歌詞は、作詞者やアーティストの公式ホームページ、または公式YouTubeチャンネルの説明欄に記載されているものを使用した。
2. 歌詞の文字数を数える際には、ハイフン（－）、括弧などの記号は除外した。ただし、長音記号（ー）、促音（っ）、感嘆符（！）、疑問符（？）は1文字として数えた。
3. 各曲について次の式を用いて「1秒あたりに歌われる文字数」を算出した。

文字数/秒 = 歌詞の総文字数 ÷ 曲の長さ（秒）

ここで「曲の長さ」とは、曲全体の再生時間を指す。

3.2 実験手順

1. 各曲の歌詞の文字数をカウントし、年代ごとに15曲の平均値を算出する。
2. 各曲の「文字数/秒」を求め、1990年代と2024年で平均値を算出する。
3. 得られた結果を、それぞれの年代の社会的背景や音楽文化の傾向と照らし合わせる。
4. 最後に、なぜそのような変化が生じたのかを考察する。

調査対象曲

1990年代（15曲）

1. 速水けんたろう・茂森あゆみ・ひまわりキッズ・だんご合唱団 - だんご三兄弟

2. 米米クラブ – 君がいるだけで
3. CHAGE & ASKA – SAY YES
4. Mr.Children – Tomorrow never knows
5. 小田和正 – Oh! Yeah
6. DREAMS COME TRUE – LOVE LOVE LOVE
7. CHAGE & ASKA – YAH YAH YAH
8. Mr.Children – 名もなき歌
9. 安室奈美恵 – CAN YOU CELEBRATE?
10. globe – DEPARTURES
11. H Jungle with T – WOW WAR TONIGHT ～時には起こせよムーヴメント
12. 宇多田ヒカル – Automati
13. 藤井フミヤ – TRUE LOVE
14. B'z – 愛のままにわがままに僕は君だけを傷つけない
15. 篠原涼子 – 恋しさと せつなさと 心強さと

2024年（15曲）

1. Creepy Nuts – Bling-Bang-Bang-Born
2. こっちのけんと – はいよろこんで
3. 星街すいせい – ビビデバ
4. Mrs. GREEN APPLE – ライラック
5. Number-i – GOAT
6. Omoionotake – 幾億光年
7. Snow Man – BREAKOUT
8. 米津玄師 – さよーならまたいつか！
9. Number-i – BON
10. Snow Man – EMPIRE
11. 友成空 – 鬼の宴
12. Number-i – INZM
13. 藤井風 – 満ちてゆく
14. Creepy Nuts – オトノケ
15. ポケモン – POKÉDANCE

4. 結果

表1 歌詞の平均文字数と1秒あたりに発声される文字数

	1990年代	2024年代
文字数の平均値	562文字	834文字
文字数/秒	2.0/秒	4.8/秒

1990年代から2024年にかけて、歌詞の平均文字数は約1.5倍、文字数/秒は約2.4倍に増

加していた。

5. 考察

歌詞の文字数の平均値が増えた要因について、以下の3つが関係していると考える。

5.1 配信制度の多様化

表2 年代別の配信形態とその特徴

	配信形態・配信制度	配信制度の特徴・変化
1990年代	CDなどの物理メディア	配信制度なし・収録時間制限あり
2000年代	着うた・iTunes	モバイル端末での配信が可能に
2010年代	サブスクなどの定額配信	多様な配信ルートが増加した
2020年代	SNS・動画配信サイト	海外展開・個人で簡単に投稿できるように

1990年代と2020年代に注目すると、両年代の音楽配信の環境には大きな違いがあることがわかる。1990年代は端末での配信制度が整っておらず、さまざまな制限のある形態であったのに対し、2020年代ではSNSや動画配信サイトを通じて、世界中の人々に楽曲を配信できるようになった。また、1990年代は大手企業やテレビ局が曲の流行を作っていたが、2020年代では誰でも曲を投稿でき、個人でも流行を生み出せるようになった。このように、楽曲制作や配信方法の自由度が高まり、発表される曲のバリエーションや表現の幅が広がったことが、1990年代から2024年にかけてJpopの歌詞の文字数が増加した一因であると考察する。

5.2 2020年代のJpopとラップの融合

ラップ：1970年代のアメリカ・ニューヨーク・ブロンクス地区で誕生した、リズムに合わせて言葉をリズムカルに発話する音楽的表現形式である。メロディを伴わず、韻やリズムを重視して構成される点が特徴である。ラップは自己表現や社会的メッセージの伝達手段としても用いられる。

調査した1990年代と2024年の15曲のうち、歌詞にラップが使用されているものはそれぞれ1曲と10曲であった。そこで、2000年代以降の米国billboard洋楽チャート調べ、ヒット曲15曲を選出した。そして、そのうちの10曲がラップを使用していることがわかった。このことから、2024年のJpopの歌詞のラップの増加は国内ではなく、国外のはやりが影響していたということがわかる。ラップは韻を踏むために言葉数を増やしたり、早口で歌ったりするのがメジャーであるため、ラップを使用していない歌詞より文字数が多くなる。

5.3 聴き手の変化

短尺動画文化の広がりも、歌詞の文字数増加に大きな影響を与えている。TikTokやYouTubeショートなどの動画サイトでは、楽曲の一部分だけが切り取られ、15～30秒程

度の短い映像として拡散されることがある。この環境では、楽曲全体の流れよりも瞬間的に耳に残る言葉が重視される。したがって、アーティストや作詞者は歌詞の中に短い時間で強い印象を与えるフレーズを用意する必要がある。全体的に印象のある表現を増やす必要があるため、曲全体の歌詞量が増加する傾向にあると考えられる。実際、短尺動画でバズを起こした楽曲が配信ランキングやストリーミング再生数を大きく伸ばす事例が数多く見られ、切り取られる場面はサビに限らず冒頭や間奏明けなどに多岐にわたるため、どの部分が拡散されても目立つように曲全体へ複数の強い表現を散りばめることが求められる。その結果、従来よりも盛り込む言葉の数が増え、自然と歌詞全体の文字数が多くなる傾向が生じている。そのため、楽曲は冒頭・サビ・ラストなど複数箇所に「刺さる表現」を配置する構成が一般化しており、歌詞全体に占める文字数も自然と多くなる。さらに、短尺動画は映像とともに拡散されるため、歌詞の一部が「キャッチコピー」として機能する役割も担う。このことから、それらを曲全体にちりばめることが文字数の増加に結びついているといえる。つまり、短尺動画文化は単に楽曲の宣伝手段にとどまらず、歌詞の構成そのものを変化させ、2020年代以降のJpopに明瞭な特徴を与える要因となっている。

6. 結論

本研究では、1990年代と2024年のJpopの歌詞を比較し、文字数や1秒あたりの発声文字数の変化を調査した。その結果、歌詞の平均文字数は約1.5倍、1秒あたりの文字数は約2.4倍に増加していることが明らかになった。この変化の背景には、音楽配信制度の多様化、ラップの流行とJpopへの融合、そして短尺動画文化の広がりによるリスナーの聴取環境の変化が深く関係していると考えられる。これらの要因は、アーティストが限られた時間で多くの言葉を詰め込み、より強い印象を残す表現を求められるようになったことを示している。また、この結果は単に歌詞の文字数が増加したという事実だけでなく、音楽が社会や文化の変化に応じて変化し続けていることを明らかにしている。Jpopは娯楽としての役割に加え、時代による価値観や人々の生活様式などの文化の変化を映す役割を果たしているといえる。歌詞の文字数や構成の変化は、その時代を生きる人々の感性やメディア環境の変化を反映しており、Jpopの発展において重要なものである。

7. 今後の展望

今後さらに本研究の意義を深めるためには、以下のような視点での研究が求められる。まず、より長期的な変化を追いつ今回調査した2つの年代だけでなく、その中間やこの先のデータも加えることで、変化の過程や転換点を詳しく把握する。また、ラップがJpopにどのように導入されたのか、またJpopのジャンルごとの傾向を比較することでより正確に日本の音楽文化の変化を見ることができだろう。さらに、近年AIでの作詞・作曲が増えていたため人間の感性が加わっていない歌詞が社会にどう影響を及ぼすのかも調査していきたい。今後は、本研究で得られた結果をもとに、日本の音楽文化のさらなる理解と発展に貢献していきたい。

参考文献

岩里祐穂（2018）、『作詞の言葉』、blueprint

遠藤幸三（２００５）、『作詞本』、シンコーミュージック

柴那典・御丹宮くるみ・小町碧音・ヒガキユウ（２０２２）、『ボカロソングガイド名曲
１００選』、講談社

見崎鉄（２００２）、『Jpopの日本語』、彩流社

ランティス（２０１５）、『プロが教えるアニソンの作り方』、リットーミュージック

ヴィットインターナショナル企画室（１９９９）、『音楽に関わる仕事』、ほるぷ出版